

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# カントの『虚言権』論文の問題：道徳的義務の両立について

著者	菅沢 龍文
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	60
ページ	53-67
発行年	2010-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/5892">http://hdl.handle.net/10114/5892</a>

# カントの『虚言権』論文の問題

## ——道徳的義務の両立について——

菅 沢 龍 文

### 序

カントが晩年にコンスタンとの論争において著した著作『人間愛から嘘をつくという、誤って権利だと思われるものについて』（1797年、『虚言権』論文<sup>(1)</sup>と略記）では、嘘をついてはならないという厳格な義務の主張がなされている。この主張はよく知られており、友人を救うという親切の義務における人間愛よりも虚言禁止の義務の方が優先されている、として一般的には問題視され、受け入れがたく考えられている<sup>(2)</sup>。そして、この『虚言権』論文をめぐることは、研究史上にも近年に至るまで多くの論考がある<sup>(3)</sup>。そうしたなかで、カントの考え方では、不完全義務より完全義務を優先するのだから、カントは、嘘をついてはならない、と厳格に主張したのだと理解されることが多い。このような理解には、それなりの理由があると思われる<sup>(4)</sup>。

しかし、カントが『虚言権』論文で虚言を問題とするとき、どういうことを問題としているのか、という点を再考する必要があると論者は考える。なぜなら次のような疑問があるからである。カントの『虚言権』論文で扱われる事例では、たとえ特定の状況下で不完全義務と完全義務とのどちらが優先されるのかという義務の選択が問題になっているという見方がありうるとしても、この論文でのカントはどのような義務の選択ということを主題としていないのではないだろうか。なぜなら、この論文と同年に出版された『人倫の形而上学』（1797年）では、そもそも義務どうしの衝突は存在しないということを述べている箇所があり、この考え方からすれば、『虚言権』論文では義務の選択ではない次元で問題が捉えられていると考えることも可能だからである。したがって、カントが義務の衝突はないと言ったときの論拠が本稿では問題となる。そこで本稿では、『人倫の形而上学』で義務の衝突がないとカントが述べる論拠を、「拘束性」と「拘束性の根拠」との区別という観点から追究する<sup>(5)</sup>。この区別に加えて、カントの道徳哲学の根本原理である定言命法の性格を考えることにより、カントの定言命法による道徳哲学の射程を考察するのが本論稿の目的である。

そこで本論稿では、まず第1節で、カントの道徳哲学の根本原理である定言命法が、どのような性格のものであるのかを検討し、その次に第2節で、道徳的義務の衝突についてのカントの考え方を分析し、第3節では、『虚言権』論文でカントが何を主題としているのかを検討し、最後に本論稿でのカント解釈が、『虚言権』論文に関する近年の他の論文との関係においてどのような意義を有するのかを検討する。そし

て以上により、カントの道徳哲学の射程を考察する。

## 1. カントの定言命法の現実性

カントの著作では、『人倫の形而上学の基礎づけ』（1785 年、以下『基礎づけ』と略記）において定言命法と仮言命法との区別についての詳細な論究がなされ、定言命法の可能性の根拠への問題についても論究される。したがってまずはこの著作によって、カントの定言命法がどういう性格のものであるのかを明らかにするのが順当である。そこで『基礎づけ』での定言命法についての次のカントの発言について検討することから始める。

〔引用 1〕「実践哲学においてわれわれにとって肝要なのは、生起することの根拠を想定することではなく、たとえ決して生起しないとしても生起すべきことの法則を、すなわち客観的＝実践的法則を想定することである。」(IV, 427) <sup>(6)</sup>

これは『基礎づけ』第二章での、いわゆる定言命法の「自然法則の方式」による義務の吟味が終わった後での発言なので、ここで「実践的＝客観的法則」と呼ばれているのは定言命法である。そこで、注意しなければならないのは、この法則は「たとえ決して生起しないとしても生起すべきことの法則」とされる点である。このように、現実には決して生起しないようなことであっても、これを命ずる、などということは虚しいのではないと思われる。ところが、定言命法はまさにこのように命ずると考えられている。それでは、このような定言命法の命令にはいったいどのような意味があるのだろうか。

このような「たとえ決して生起しないとしても生起すべきことの法則」という定式は、「君は為すべきであるのだから、為すことができる」という趣旨の周知のカントの発言のもつ意味にも通ずる <sup>(7)</sup>。この発言は「為すことができる」に含まれる「できる (können)」といういわば自由の地平が、定言命法によって開示されることを意味する。しかも、この自由は、行うにあたっての障害がないという経験的（物理的）自由や、ある目的のために事情をあれこれ熟慮して最善の意志決定をするという心理学的自由ではなくて、意志の絶対的自発性としての自由を意味している。なぜなら、ここで「為すべし (sollen)」とされる命令は、仮言命法の命ずる当為ではなくて、定言命法の命ずる当為だからである <sup>(8)</sup>。

ところで、意志の絶対的自発性としての自由は、絶対的自発性であるからこそ、現象において観察される原因性のなかでは検証され説明される、ということがありえないような自由である。それでもカントによれば、定言命法の命令によって意志を規定するときに形成される意志が善意志であって、この意志こそが純粋実践理性による絶対的自発性をもつと考えられる。そこで、この場合に注意すべきことは、カントが自由を問題とするとき、さしあたり絶対的自発性による自由な意志規定を論じているのであって、そのような自由な意志によって決定された現実の行為がよい結果をもたらすかどうかを論じているのではないのだから、まずもって自由な意志規定がなされたうえで、よい結果をもたらす努力が求めら

れると考えられることである。

## 2. 義務の衝突

『虚言権』論文は、「困窮している他人の幸福を促進する」ことを命ずる親切の義務としての人間愛<sup>⑨</sup>と「嘘をついてはならない」という虚言禁止の義務との衝突の事例であると考えるのは、実際に論ぜられている内容からしては自然であるように思われる。もっとも、まずはカント自身がどう考えているのかが問題であろう。そこで、カントの『人倫の形而上学』に目を転じ、「人倫の形而上学への序論」にある「人倫の形而上学のための予備概念」の節の中で義務の衝突について述べられている次の箇所を見ておく。

[引用2]「義務の衝突 (collisio officiorum s. obligationum) とは、一方の義務が他方の義務（全部、あるいは一部の義務）を廃棄するといった義務の関係であろう。——しかし、義務や拘束性は一般に、ある行為の客観的な実践的必然性を表現する概念であって、相対立する二つの規則が同時に必然的であることはできず、もしその一方の規則に従って行為することが義務であるならば、それに対立する規則に従って行為することは、義務でないばかりか、義務に反してさえいるのである。そうであるから、義務や拘束性の衝突はまったく考えられない (obligationes non colliduntur)。」(VI, 224)

カントが定言命法において道徳的な義務だと考える義務として、親切の義務や虚言の禁止の義務はしばしば取り上げられる。つまりカントの場合にこれらの義務は、同じ定言命法という根拠に基づいて義務であると認定されている。そこで、「困っている人を助けるべし」という親切の義務と「嘘をついてはならない」という虚言禁止の義務とは、カントが義務の衝突と述べている意味でお互いに衝突しあうのかどうかの問題である。上の引用文を見ると、「一方の義務が他方の義務を廃棄する」という関係にあるとき、これらの義務は衝突する。すると、親切の義務としての人間愛と虚言禁止の義務とがお互いに廃棄しあうのかどうかの問題となる。それでは、お互いに廃棄しあうとはどういう事態を意味しているのだろうか。この事態の理解の仕方には次の2通りが考えられる。

- (1) 親切の義務としての人間愛が道徳的義務であれば、虚言禁止の義務が義務でなくなる。他方で、虚言禁止の義務が道徳的義務であれば、親切の義務としての人間愛が義務ではなくなる。
- (2) 親切の義務としての人間愛が道徳的義務であれば、この人間愛に反するような（不道徳的な）義務（こういった義務があるとして）は廃棄される。同様に、虚言禁止の義務が道徳的義務であれば、虚言禁止に反するような（不道徳的な）義務は廃棄される。

そこで、カントは (1) のような捉え方をして、虚言禁止の義務を優先したのだと考えられるかどうか、ということが『虚言権』論文では問題だと思われる。なぜなら、(1) の場合に、本当に義務どうしがお互いに廃棄しあう関係になるのか、という点については、例えばフィヒテならばこの点を次のように否定する方法がありうるからである<sup>(10)</sup>。すなわち、家に匿っている、殺人鬼に追われている人を助けるためには、その人が家にいるかいないかについてその殺人鬼に私が聞かれたときに、嘘をついてはならず、その殺人鬼を非難すべきであり、この非難が役に立たなかったならば、物理的手段によって対抗するという方途が常に残されているのである、と。これは、義務どうしが矛盾対当の関係にないことを意味する。この論法を認めるならば、(1) の場合はお互いに廃棄しあうような義務の衝突ではない。そうすると (2) の場合が義務の衝突になるのではないかと考えられる。しかし、この場合には、一方が義務であれば、他方は「義務に反してさえいる」のだから、やはり義務どうしの衝突は考えられないことになる。ところが、[引用 2] に続く次のカントの文章では「二つの拘束性の根拠」の衝突について語られる。

[引用 3] 「しかし、二つの拘束性の根拠 (*rationes obligandi*) のどちらか一方が義務づけには不十分である (*rationes obligandi non obligantes*) のに、それらの根拠が一個の主体において、そして主体が自身に指図する規則において、結びつけられることは十分にありうる。そうした場合、どちらかが義務ではないのである。——こうした二つの根拠が互いに衝突する場合、実践哲学では、より強い拘束性が優先する (*fortior obligatio vincit*) といわず、より強い義務づけの根拠が優勢である (*fortior obligendi ratio vincit*) というのである。」(同上)

この引用箇所「二つの拘束性の根拠」と言われているのが、例えば親切の義務と虚言禁止の義務との二つである、と理解すれば、「どちらかが義務ではない」ということになり、やはり上記の (1) の理解の方が正しいのではないか、という疑念が生ずることになる。ところが、この箇所では、最後に「より強い拘束性」と「より強い義務づけの根拠」とが区別されている。この区別の趣旨によれば、義務がお互いに廃棄しあうような関係にあるとき、より強い拘束性が優勢なのではなくて、より強い義務づけの根拠が優勢であるから、「どちらかが義務ではない」ということになる。

カントの考える完全義務と不完全義務とを比べるならば、完全義務はゆるがせにできない義務であり、これに反することは悪徳（「負債＝マイナス」）になるのであるが、不完全義務は功績的な義務であり、この義務への違反はただちに悪徳にはならないで、たんに「道徳的な無価値＝ゼロ」であるにすぎない (vgl. VI, 390)。ところで、カントによる義務の区分では、虚言禁止の義務は完全義務であり、親切の義務は不完全義務である。したがって、拘束性という点では、虚言禁止の義務の方が、親切の義務よりも優先すると考えることはできる。しかしこの両義務の関係は、義務づけの根拠が衝突している、とまで言えるような関係なのか、さらに考える必要があると思われる。

そこで、より強い義務づけの根拠ということでカントは何を考えているのか、をさらに追究するにあたって、段落を変えてすぐ後に続く「自然的法則」と「実定法」との区別についての次のカントの論述

から示唆を得ることができるのではないかと考えられる<sup>(11)</sup>。

[引用4]「一般に、外的立法が可能な拘束的法則は、外的法則 (leges exsternae) と呼ばれる。こうした法則のうち、外的立法を欠いてもその拘束性が理性によってアプリアリに認識されうるものは、なるほど外的ではあるが、自然的法則である。これに対して、現実の外的立法なしにはまったく拘束的ではない（それゆえこれを欠いては法則とはならない）ものは、実定的法則と呼ばれる。それゆえ、実定的法則だけを含む外的立法が考えられるが、この場合には、立法者の権威（すなわち、かれの単なる選択意志によって他人を拘束する権能）を根拠づけるような自然的法則が先行しなければならないであろう。」（同上）

この引用箇所では、自然的法則と実定的法則とが対比されている。法則は、義務づけの根拠であるから、ここでは二つの種類の義務づけの根拠が対比されているとも言える。それでは、どのように対比されているのだろうか。まず、実定的法則は現実の外的立法によってはじめて拘束的になる（これは「法則となる」と言い換えられている）。そして、「実定的法則だけを含む外的立法」には、「立法者の権威を根拠づけるような自然的法則が先行しなければならない」とされている。つまり、自然的法則の方が実定的法則よりも優勢であると考えられる。すると、実定的法則の立法者が自然的法則によって正統化されていなければ、換言すると、その実定的法則という拘束性の根拠が自然的法則という拘束性の根拠と衝突すれば、前者の拘束性の根拠の方が廃棄されることになると考えられる。しかも、ここで自然的法則とされているのは、カントの自然法の原理であるから、定言命法に依拠する法則である<sup>(12)</sup>。つまり、定言命法による自然法を根拠とする義務と、実定法を根拠とする義務とが衝突する場合には、実定法による義務が義務ではなくなるのだと考えられるのである。

それでは、先の親切の義務の根拠と、虚言禁止の義務の根拠とを比べるとどうなるだろうか。これらはカントの思想では、不完全義務と完全義務という点で拘束性には相異が認められるにしても、どちらも定言命法を義務づけの根拠としていると考えられる。つまり、親切の義務における人間愛と虚言禁止の義務とは、義務づけの根拠において衝突するどころか、一致しているのである。

以上のように引用 [2] から [4] までの一連の箇所を理解するならば、親切の義務における人間愛と虚言禁止の義務とはその根拠からみて、衝突しないのである。したがって、この一連の箇所では、不完全義務が完全義務に譲らなければならない、とまでは述べられていないのであると理解できる。

### 3. 『虚言権』論文をめぐる

『虚言権』論文を取り上げるとき、まず注意すべきなのは、『人間愛から嘘をつくという、権利と思われるものについて』という表題である。つまりこの表題からすれば、『虚言権』論文での主題は権利の問題であり、しかも「人間愛から嘘をつく権利」である。この権利について論ずることは、カントの『人

倫の形而上学』での徳義務と法義務との区分から見れば、親切の義務という徳義務における人間愛に基づいて、嘘をつく権利について論ずる、ということになるから、これでは倫理と法との境界を侵していると考えられる。したがってカントからすれば、親切の義務における人間愛に依拠して、肯定するにせよ、否定するにせよ、嘘をつく権利について論ずるということは、そもそもありえないことなのである。表題から推測されるこのような無意味さについて論ずるのであれば、『虚言権』論文の中では、虚言禁止の義務と並んで人間愛について十分に論ぜられる必要があるように思われる。ところが、『虚言権』論文では表題において「人間愛」の語が登場するのに、本論において人間愛について論ずることはしていないのである。そして、虚言禁止論に終始するのである。それでは、『虚言権』論文ではなぜこのような表題と中身との乖離と思われる事態が生じたのだろうか。

このような問いに直面すると、カントの立場からすれば、人間愛から嘘をつく権利には法義務における権利が徳義務に基づけられるという混乱があることは自明である、つまり人間愛から嘘をつく権利、これについて人間愛に力点を置いて論ずるまでもない、とカントは考えていたのではないだろうか。そして、この問題が終わったところからカントの議論は始まっているように思われる。つまりカントは、人間愛に依拠するという点は最初から論外として、嘘をつく権利が人類社会において認められるかどうか議論を集中させているのである。

ところで、嘘をついてはならないということであれば、他人との間の権利にかかわる法義務であるばかりか、権利とは無関係の徳義務でもある。しかし、カントは徳義務における虚言禁止の義務については『虚言権』論文では論じない。これはなぜだろうか。この問いにかかわる、『虚言権』論文でのカントの言葉を次に引用する。

[引用 5]「私はここでは原則を、「不真実性は自己自身に対する義務に違反することである」と言うほどまで先鋭化したいとは思わない。それというのも、これは倫理学に属することであるが、私がこの論考で問題にしているのはひとつの法義務についてだからである。——徳論はたんに、その違反のうちに卑劣さ (Nichtswürdigkeit) を見るだけであって、卑劣だったという非難は嘘をついた人が自分自身に招く非難なのである。」(VIII, 426)

この引用箇所によれば、倫理学における徳義務では虚言の禁止は、法義務の場合よりも「先鋭化」していて、この義務違反からは、卑劣だったという自分自身への非難が生ずるのである。ところでカントによれば、法義務は「間接的な倫理的義務」(VI, 221)であり、倫理学に属する自己自身に対する義務が存在しなければ、およそ義務はどこにもなく、「外的義務」さえも存在しない (vgl. VI, 417), というように考えられる。それゆえ、法義務における虚言禁止の義務に反するならば、すでに倫理学における自己自身に対する義務としての虚言禁止にも反しているのであるから、卑劣だったという非難も当然のこととしなければならないことになる。つまり『虚言権』論文では法義務が主題となるから倫理学に属するような虚言の禁止にまで論究しないのではあるが、そればかりか、そもそも嘘をついたことに対する自

己非難は言うまでもないことなので、カントは倫理学に属するような虚言禁止をここで論ずる必要があると認めていないのでもある。したがって『虚言権』論文での問題は、法義務としての虚言の禁止がどれだけの妥当性をもつものなのか、という点に絞られている。

こういうわけで、カントの『虚言権』論文における議論は、法義務としての虚言禁止の義務のいわば根源性がどの程度であるか、を示すことに向かう。さて、カントの整理では、コンスタンによって提出された問題は次の二つになる。

[引用 6]「第一の問題はイエスカノーかで答えざるをえないような場合に、人は不真実 (unwahrhaft) である権能 (権利) を持つのか、という問題である。第二の問題は、不当な強制によって強要されて言表する場合に、自分に迫っている悪行そのものを防止するために、あるいは他人を守るために、不真実であるように拘束されているのでさえあるのか、という問題である。」(VIII, 426)

第一の問題は、不真実である権能 (権利) を持つか否かに関するものである。第二の問題は、不真実であることへの拘束性 (義務) を持つか否かに関するものである。コンスタンはこれらの問題について、特定の条件のもとで肯定的に答える立場であると言える。ところが、カントはこれらの問題に否定的に答えるばかりか、むしろ次の引用で見るように、真実性が義務であるとまで考えるのである。

[引用 7]「どんな人間も、しないですますことができない言表において、たとえそれが自分自身や他の人に損害を与えようとも、真実性への権利のみならず、真実性への厳格な義務さえ持っているのである。したがって、ほんとうは彼自身が真実の言明によって被害者に損害を与えるわけではなく、偶然が損害を引き起こすのである。」(VIII, 428)

このように、たとえ自他の損害が生じようとも、真実性を義務とまでする理由は何だろうか。[引用 6]と [引用 7] とに挟まれているテキストでは、次のような言明がこの理由を示している。

[引用 8 - 1]「しないですますわけにはいかない言表における真実性 (Wahrhaftigkeit) は、たとえその結果として自分や他人にどんな大きな不利が生じようとも、万人に対する人間の形式的義務である。」(VIII, 426)

[引用 8 - 2]「私は (法律家の考えることではないにしても) 虚言と呼ばれうるそのような虚偽の言表によって、本質的な点で義務一般に対して不正を行うことになるのである。私は、自分の責任において、言表 (言明) 一般の信用をなくさせ、したがってまた、契約に基づくすべての権利を無にし、その力を失わせるのである。それは、人間性一般に対して加えられる不正なのである。」(ibid.)



これらの引用から見て取れるように、真実性は「万人に対する人間の形式的義務」であり、虚言は「人間性一般に対して加えられる不正」であるから、虚言は禁止され、真実性が義務であることになる。このようなカントの考え方は、[引用 8-2] にも触れられているように、法律家の考えることではない。この点は次の引用文からも見て取れる。

[引用 9]「虚言は、他人に対する意図的な不真実な言明とたんに定義されればよいのであり、それが他人を害するものでなければならないという付記を加える必要はない。法律家はそのような付記を嘘言の定義に要求するが（「虚言とは、他人の損害になる偽りの言である（mendacium est falsiloquium in praejudicium alterius.）」と）。それというのも、虚言はつねに他人を害するからである。すなわち、たとえだれか特定の他人に損害を与えはしない場合でも、法の源泉を使用不可能にすることによって人間性一般に損害を与えるのである。」(ibid.)

法律家は、このような人間性一般が損なわれるという点を考慮することはない。法律家によれば、不当に言表へと私を強要する者に対しては、虚言によって不正はなされないのである。なぜなら法律家にとっての虚言は、法権利上での他人の損害や不利益になる偽りの言に限られるのだからである。それゆえ、法律家は[引用 6]における二つの問題に条件付きで肯定的に答えるのである。しかしカントは、[引用 9]に見たように、法律家と違って、これらの問題についていわば無条件的に否定的に答えた。これは、カントによれば、虚言は「人間性一般」を損なうからであった。

このように法律家の場合とカントの場合とで考え方がずれる点については、次のようにまとめることもできる。他人に対する虚言は法における他人の権利（人間の権利）を侵害しないのであれば法律上では禁ぜられないとしても、少なくとも人間性の権利（自由）を侵害して人間性一般を崩壊せしめるという点で、他人に対する虚言の禁止はやはり法義務なのである<sup>(13)</sup>。

さて、先の[引用 7]の第1文は[引用 6]を条件付きで肯定するコンスタンとは対照的に、カントの立場を述べていたのであるが、そればかりか、第2文では、「偶然が損害を引き起こす」という考え方をしている。この考えを示すために、カントは偶然性が目立つ珍しい事例をわざわざ作り出して次の引用のように説明をする。

[引用 10]「きみが厳格に真実をかたくもったとすれば、たとえその予測できない結果がどんなものになろうとも、司直はきみに何の手出しをすることもできないのだ。しかも、その人殺しに狙われている人が家にいるかという問いに、きみが正直にはいと答えたあとで、この狙われている人が気づかれずに外へ出ていて、犯人と出会うことがなく、それゆえ犯行も行われることがなくてすむ、ということもありうるのである。しかし、もしきみが嘘をついてその狙われている人は家にはいないと言ったとして、その彼が実際にも（きみが気づかない間に）外へ出て行って、そしてそのとき、人殺しは立ち去ろうとする彼に出会い、彼に対して犯行を行うに至るかもしれないのだ。その

場合、きみは彼の死を引き起こした張本人として起訴されても当然であろう。」(VIII, 427)

この事例では偶然の出来事について書かれていて、あまりに取って付けたような例であるという印象を受けるので、この印象が先立ってしまい、かえってカントの意図するところが理解されにくい。これでは、真実を語って生じた極めてまれな、いわば幸運な結果ではなくて、たいがい生じそうな不幸な結果について、偶然性の責任にして責任逃れをすることになるのではないかと受け止められても仕方ないようにも思われる。しかしここで思い出さなければならないのは、前節で見たフィヒテの考え方であり、そして次の点である。すなわち、真実を語ることは義務であり、また友人を救うことも義務であり、これらの義務づけの根拠は一つの定言命法であるのだから、これらの義務は少なくとも意志規定において互いに他を廃棄しあう関係ではないのである。そして最初の[引用1]で言うように、「たとえ決して生起しないとしても生起すべきことの法則」が定言命法なのであるから、両方の義務はどちらもたとえ生起しないとしても、生起すべきなのである。

すると、真実を語るべきだから、真実を語るとしても、その語り方が問題になってくるのではないだろうか。つまり、友人を救うべく真実を語ることが定言命法の命ずるところなのである。これはフィヒテならば追っ手と戦うことになるのかもしれない。道徳的義務が何かが分かれば、あとは義務に従う善意志を実現する手段が問題となる。この手段の問題に答えるのはすでに定言命法ではなく、「経験によって研ぎ澄まされた判断力」(IV, 389)であり、思慮深さであり、仮言命法であると考えられる<sup>(14)</sup>。例えば、カントは1791年にやって来たフィヒテに借金を申し出られたときに、借金をするのもしさせるのも道徳的義務に反すると考えたためであろう、断ったのである。しかしカントは他方で、フィヒテが持ってきた原稿を出版するための世話をしあうことによって、フィヒテが自らの手で現金収入を得るように計らったのである。こうして、借金をさせないという義務と、困窮している人を救済するという義務とはみごとに両立したわけである。

それでは、両方の義務によって意志を規定せず、一方の義務によって意志を規定した場合は、その行為はカントの説く道徳においてはどのように評価されるのだろうか。これを『虚言権』論文の問題について考えてみる。すると、友人を救うべく嘘を語って、友人を救うために意志を規定したとすれば、友人を救うべく意志規定をして行った点では道徳的に褒められるのであるが、嘘を語るという意志規定の点では、道徳的にマイナスであることになる。しかも、嘘をつくように意志規定したことは友人を救う義務によって意志規定したことによって帳消しになるわけではない。なぜなら、両方の義務はお互いに廃棄しあう関係にないからである。したがって、たとえ実現しなくとも、定言命法が命ずるのは嘘をつかずに友人を救うという両方の義務の両立であるから、両方の義務によって意志を規定してはじめて、定言命法に従って行為しうることになると考えられる。

#### 4. 本稿の解釈の意義——近年の関連論文との対比から——

本論稿の特色はまず、[引用 1] に見るように、定言命法は「たとえ決して生起しないとしても生起すべきことの法則」であることに着目した点にある。それから第二に、「義務の衝突はない」というカントの説について、「より強い義務づけの根拠」が優勢になる、という場合の根拠が定言命法であると解釈した点にある。そして第三に、『虚言権』論文での問題の論究は、表題から思い見られるような、親切の義務における人間愛と、虚言禁止の義務との両者における衝突の論究が正面からなされておらず、論究されているのは、法義務としての虚言禁止が法律上の虚言禁止よりも射程が大きく、虚言による損害の有無にかかわらず、人間性の権利が侵害されるかどうかという点に法義務における虚言の禁止の根拠が求められている点に着目したことである。これら三点が総合されることによって、定言命法は人間愛の義務と虚言禁止の義務との両立を求めるのであり、このように意志を規定してはじめて、人間は絶対的自発性という真の意味で自由たりうることが示された。これによれば、われわれはこの一つの定言命法が命じる複数の義務を両立すべく、たとえ現実には生起しなくとも、意志を規定して、思慮深く努力すべきなのである。

以上の三点のうち、第一点は、同じ引用箇所が用いられるわけではないが、慧眼にもエッセー<sup>(15)</sup>によって着目されている。第二点の「義務づけの根拠」が何であるかについては、谷田<sup>(16)</sup>やベッツラー<sup>(17)</sup>によって着目されているが、本稿のように捉えられてはいない。講義録も用いた谷田の発展史的研究によれば、義務づけの根拠は完全義務と不完全義務である。ベッツラーの解釈では、義務づけの根拠が定言命法において一致するということまで行かず、義務づけの根拠は格律と考えられているので、義務とされる道徳的格律どうしの衝突は発生することになるのであり、その上で真の義務であるのは、双方の義務のうち、状況の中の諸条件を勘案してより普遍性の高い義務（格律）を命ずるのが定言命法なのだというように解釈されている。格律は義務づけの客観的根拠ではなくて、道徳的であるかどうか定言命法によって吟味されねばならない主観的な行為原則であるから<sup>(18)</sup>、このようなベッツラーの解釈は本稿と異なる解釈である。本稿の解釈ではカントは、[引用 4] に関してみたように、自然的法か実定法かといったレベルでの義務づけの根拠を念頭に置いていると理解でき、このように理解すれば、義務の衝突がないというカントの発言がそのまま理解できると本稿では論じた。第三点の法義務の特色については、人間性の権利にまで論究するわけではないが、シジウィックが論じている<sup>(19)</sup>。また、『虚言権』論文を人間性の権利の観点から論ずることは、注（13）に挙げた別の拙稿やその後のオーバラーの論文ですで行われている。もちろんこれらの論点以外からの近年の注目すべき論稿もみられる<sup>(20)</sup>。

以上からみて、本稿の独自の点は上の第二点、すなわち義務の衝突がないというカントの発言について、一つの定言命法という義務づけの原理によって立てられるもろもろの道徳的義務どうしには衝突はないのだという意味に解釈している点であると思われる。

このような本稿での、義務の衝突がないというカントの発言についての解釈は、現代に生きるわれわれにとって一般にどういう意味を持つであろうか。例えば、第二次世界大戦でシンドラーや杉原千畝が

ユダヤ人を救った行為は、当時の実定法である法律と心の内なる良心との間での葛藤において良心が勝利した行為であったと考えられる。この場合には、本稿で解釈したカントの立場からみれば、義務どうしの衝突ではなくて、義務づけの根拠における衝突が生じていると考えられる。カントにとっては、内なる良心は定言命法に基づく内的な法廷でもある。したがって、義務づけの根拠の強さから言えば、定言命法と衝突する義務は廃棄されなければならない。そこまでは定言命法の命令だから、カントによれば、純粋な実践理性に従えば誰にとっても明らかであることになる。

そこで次の問題は、嘘をつかないという真实性の義務を守りつつ、困窮している人間を救うことである。これは、定言命法による道徳的義務を両立させるとする課題になる。この課題については、定言命法は本稿の〔引用1〕でみたように「たとえ決して生起しないとしても生起すべきことの法則」であるから、現実には解決する方法までは教えない。そこで、道徳的義務を現実において実現するためには、現実について賢明でなくてはならず、目的実現のための手段を命ずる仮言命法に長けている必要があると考えられる。そしてこれ以上のことについては、さまざまな状況の中での現実の道徳問題として、カントの道徳哲学は語り尽くすことができないのである。つまり、カントの定言命法は、道徳的には何をなすべきかという原則（格律）を純粋に理性的に示すのであり、これによって意志を決定できるという点で優れているのであり、その命令をどのように実現するのかは、さらに各人の経験によって研ぎ澄まされた判断力に任されざるをえないのである。

## 註

※カントの原典からの引用箇所は慣例に従い、アカデミー版の巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で併記し、『純粹理性批判』については初版をA、第二版をBとして、これらに頁数を併記する。

- (1) カントのこの著作は『嘘論文』というように略記されることが多い。これは、mendaciumやLügeを嘘、falsiloquiumを虚言というように訳し分けるならば、厳密な略記だと言える。そうではあるが、この略記では論文が嘘であるという意味にもとれなくはない。だから論者はかつて『虚言論』と略記したこともある。しかし、カントのこの論文はコンスタンとの論争でもあり、徳論における虚言の禁止にまで論究されていないので、『虚言論』と言うのでは範囲が広すぎると思われる。そこで注目されるのは、次注(2)の滝浦静雄が、「虚言権」論文というように略記していることである。これはカントの本論文の表題にある権利の語を生かしており、しかも権利にかかわる義務が問題の中心にあることを示す意味でよい表現だと思われる。本論稿ではこの表現を採用することにして『虚言権』論文と略記する。なお「誤って権利だと思われるもの」はvermeintes Rechtの訳語。岩波版のカント全集第13巻での谷田信一訳では「権利と称されるもの」、理想社版のカント全集第十六巻での尾渡達雄訳では「誤った権利」というように訳されていて、vermeinenという原語の意味からの苦心の訳語だと思うが、ここではあえて「誤って～と思われる」というように訳してみた。
- (2) 比較的最近では滝浦静雄『道徳の経験——カントからの離陸』南窓社、2004年。とくに「4.「虚言権」論文について」(36-44頁)参照。
- (3) 『虚言権』論文を論ずる近年の文献は、本稿の本文や注で取り上げるが、さらに以前のものについては、論者はかつて次の論文で欧文献の9論文、和文献の5論文について触れたことがある。菅沢龍文「カント『道徳形而上学』における虚言の禁止」『哲学年誌』第24号、濱田義文教授・加来俊彰教授退職記念号、1993年、103～118頁、とくに注(1)を参照。
- (4) 日本で早い時期にこの問題について「不完全義務に対する完全義務の優越」という観点から成立史的にも詳細に論じたいへん教えられるところの多い論文として、次のものがある。谷田信一「カントの実質的義務論の枠組みと「嘘」の問題」『批判的形而上学とはなにか』カント研究会・牧野・福谷編、晃洋書房、228～272頁。

- (5) 関連論文を管見する範囲では、『人倫の形而上学』で義務の衝突がないとカントが述べるときの論拠を、「拘束性」と「拘束性の根拠」との区別という観点から論じていて、さらにその拘束性の根拠としての定言命法にまで論究するものはない。
- (6) 同様の論述が次のようにカントの『実践理性批判』でも見られる。「道德法則は、いわば純粹理性の事実としてわれわれに与えられており、われわれはこの事実をアプリアリに意識している。しかも、道德法則が厳密に順守された実例を経験において見出せないとしても、この事実は確然的に確実なのである」(V, 47)。
- (7) カントの『実践理性批判』では次のように書かれている。「もっぱら義務の神聖性のために一切を後回しにすること、そしてわれわれ自身の理性がそれを命令として承認し、かつそれをなすべしと命ずるからそれをなすことができると意識すること、これらのことは、いわば感性界そのものをまったく超え出ることを意味する。そしてこの意識には、法則の意識がまた感性を支配する能力の動機として不可分に結び付いている。もっともそれは、つねに効果を伴うとは限らないが」(V, 159f. 傍点はカントによる強調箇所)。エッサーも拙稿と同様の趣旨で、この周知の言い回しに注目している。ただし『実践理性批判』のこの箇所への参照指示はしていない。Vgl. Andrea Esser, Kant und moralische Konflikte, in: *Kant und die Berliner Aufklärung*, Bd. III, Hrsg. im Auftrag der Kant-Gesellschaft e. V. von V. Gerhardt, R.-P. Horstmann und R. Schumacher, Walter de Gruyter, 2001, S.194-201, insbes. 198. Andrea Esser, Kant on Solving Moral Conflicts, in: *Kant's Ethics of Virtue*, edited by Monika Betzler, Walter de Gruyter, 2008, S. 279-302, esp. 297f..
- (8) 『実践理性批判』によれば、純粹幾何学における実践的命題としての要請 (Postulat 公準) があり、この命題は「もしなにかをなすべしと要求されれば、それをなすことができるという前提を含むにすぎないもの」であるとされる (vgl. V, 31. 傍点はカントによる強調箇所)。この表現は前注 (7) で定言命法に関して「べし」と「できる」を用いた表現とまぎらわしいので、以下に注意しておく。例えば『純粹理性批判』では、このような純粹幾何学の要請として、「所与の線を使って、平面上の所与の点から円を描く」という命題の例を挙げている (vgl. A 234, B 287)。これと対比して、『実践理性批判』の論述では、「純粹実践理性の根本法則」(定言命法) は、「われわれが端的にある仕方では振る舞うべきである」(傍点は菅沢による強調) ということを告げており、「無条件的」であり、「定言的に実践的な命題としてアプリアリに」表される (vgl. ebd.)。そして、この命題によって意志は、「端的に、そして直接的に (実践的規則そのものを通じて、それゆえここではこの規則は法則であるが)、客観的に」規定される (vgl. ebd.)。このようなカントの定言命法に関しては、純粹幾何学の場合と似て、前注 (7) でみたように、なす「べし (sollen)」であるが「ゆえに (weil)」, なすことが「できる (können)」という定式で表現される。それでは、定言命法の実践的命題の場合と、純粹幾何学の実践的命題の場合との相異点はどこにあるのだろうか。この相異点は、純粹幾何学の実践的命題は、「意志の蓋然的条件」の下にある実践的規則である (vgl. ebd.), とされていることから明らかである。つまり、純粹幾何学の実践的命題は、『人倫の形而上学の基礎づけ』で区別される諸命法の中でも、技術的な仮言命法にすぎないのである。それだから、本注 (8) の冒頭では、純粹幾何学の実践的命題には、なす「べし」である「ならば (wenn)」, なすことが「できるという前提」が含まれているにすぎない、とされていたと考えられる。そしてこの「前提」に注意すると、さらにこの「べし」は、「もし～できるという前提があるならば、～をなすべし」という仮言的な条件付きの命令なのである。このように、もし技術的な仮言命法の命令があれば、その命令は、なすことが「できる」という前提のもとで、なす「べし」と命じていることになる。これは前注 (7) の定言命法の場合に、なす「べし」であるゆえに、なすことが「できる」、とされるのと比べて、「できる」と「べし」の順序が逆転していることに注意すべきであろう。
- (9) 『人倫の形而上学』の「徳論」によれば、「人間愛について」と題された節で「愛すべきである (愛を強要される) からといって愛することはできない」のだから「愛するという義務はばかっている」のだが、「好意 (amor benevolentiae) は、行いとしては、義務法則の支配下にある」とされる (vgl. VI, 401)。その一方で、「他人に対する愛の義務について」の章の中の「とくに愛の義務について」と題される第 26～28 節で次のように書かれている。「人間愛 (Philanthropie 博愛) は、ここでは実践的なものとして考えられ、したがって人間に対する満足の愛とは考えられないのだから、行いによる好意のうちにみられねばならず、それゆえ行為の格律に関係するのである」(VI, 450) と。そしてこのように「好意が実践的であること」は、「愛の義務の区分」の中の「親切の義務」について書かれている第 29～31 節では、「困窮者に対する親切」と言い換えられている (vgl. VI, 452)。さらに、「親切であること、すなわち、自分の能力に応じて、見返りを期待せずに、困窮にある他人の幸福を促進することは、すべての人間の義務である」(VI, 453) とされる。このように親切の義務は、「愛の義務」とされている。ところで、『虚言権』論文では、困窮者である友人に対する人間愛は、実践的なもの

- のと理解できるから、行為の格律に関係するものであり、親切の義務としての愛の義務だと考えられる。
- (10) Vgl. Johann Gottlieb Fichte, *Das System der Sittenlehre nach den Prinzipien der Wissenschaftslehre* (1798), § 23 (in: Werke, ed. I. H. Fichte, Berlin 1971, Bd. IV, 284f.). J. G. F. フィヒテ『フィヒテ全集 第9巻 道徳論の体系』忽那敬三・高田純・藤澤賢一郎訳, 哲書房, 2000年, 341頁参照。Beatrix Himmelmann, Die Lüge als Problem für Kants praktische Philosophie, in: *Kant und die Berliner Aufklärung*, Bd. III, Hrsg. im Antrag der Kant-Gesellschaft e. V. von V. Gerhardt, R.-P. Horstmann und R. Schumacher, Walter de Gruyter, 2001, S. 236-238.
- (11) 当該テキストはカントの『人倫の形而上学』の「法論」におけるものである。この「法論」は新たに1986年に、ルートヴィッヒの校訂によるいわゆるルートヴィッヒ版『法論』単行本としてFelix Meiner社から出版されている。この版では、当該テキストの箇所に加えて、[引用2]と[引用3]とで成り立っている段落は別の位置にずらされているので、これらの引用の後に[引用4]の段落が続く形になっていない。後に記すルートヴィッヒの研究書によれば、この段落の移動は、次のような事情による。[引用2]と[引用3]とから成る段落は、「前触れもなく突如としてこの場所にある」。すなわち、これらの引用の前の段落に帰属する「義務概念の論究」には、[引用2]と[引用3]とから成る段落が続くのではなくて、[引用4]の段落が続く、と考えられている。たしかにルートヴィッヒ説の主張する段落間の整合性は、それとして考え得るものである。しかし、岩波版カント全集での「法論」の邦訳者である樽井正義氏は全集の翻訳の解説において、ルートヴィッヒ版について、ルートヴィッヒの法論研究の独創性は認めつつも、「この編集はすべて既刊の資料に基づくものであって、いずれかの新たな発見を利用したものではない。したがって、カントのこれまで知られなかった思索が、この版によって初めて示されるわけではない」(430頁)と指摘したうえで、「従来の版ではカントの思索が理解できないということではまったくない」(同所)とされている。また、カントの法論についてはすでに批判期以前に材料面では出来上がっていたというリッターの研究もあり、カントの晩年になって批判期以降の新しい考え方を『法論』に織り込む作業が急いでなされたために、テキストにいびつな印象を残すことになってしまった、と考えることも可能であろう。Vgl. Bernd Ludwig, *Kants Rechtslehre*, Kant Forschungen Bd. 2, Herausgegeben von Reinhard Brandt und Werner Stark, Hamburg, 1988, S. 52. Ch. Ritter, *Der Rechtsgedanke Kants nach den frühen Quellen*, Frankfurt am Main, 1971.『カント全集 11 人倫の形而上学』樽井正義、池尾恭一訳、岩波書店、2002年、参照。
- (12) カントの自然法論の原理が定言命法であることについては、次の拙論を参照。注(3)前出拙論「カント『道徳形而上学』における虚言の禁止」。「カントの『法論』における内的完全義務 — ヴォルフ、クルージュスとの対比」濱田義文・牧野英二編『近世ドイツ哲学論考』法政大学出版局, 1993年4月(共著) pp.227-244。「カントにおける国家設立と法概念」『法政大学文学部紀要』第42号, 1997年3月, 1-19頁。「カントの法思想における戦争と平和」『法政大学文学部紀要』第44号, 1999年3月, 25-48頁。「定言命法によるカントの私法論 — 睿智的占有とウルピアヌスの法式 — 」『法政大学文学部紀要』第48号, 2003年3月, 1-22頁。「定言命法によるカントの家社会論——物権的対人権について——」『法政大学文学部紀要』第52号, 2006年3月, pp.1-14.
- (13) このような人間性の権利による『虚言権』論文の考察は注(3)で前出している次の拙論において行った。「カント『道徳形而上学』における虚言の禁止」のとくに111-114頁。その後も、オーベラーが次の論文で論じている。Hariolf Oberer, Honeste vive. Zu Immanuel Kant, Die Metaphysik der Sitten, 06, 236. 20-30, in: *Metaphysik und Kritik*. FS f. M. Baum z. 65. Geburtstag, hrsg. v. S. Doyé et al., Berlin 2004, S. 203-213, insbes. 210ff.
- (14) この意味で、エッサーは注(7)に前出の次の論文で「道徳性の実用的な次元」についてまで論究していると考えられる。Andrea Esser, Kant on Solving Moral Conflicts, *a. a. O.*
- (15) 本稿の注(7)を参照。
- (16) 谷田信一「カントの実質的義務論の枠組みと「嘘」の問題」(注(4)前出論文)の第2章(241-250頁)参照。
- (17) Monika Betzler, Moralische Konflikte: Versuch einer kantischen Deutung, in: *Kant und die Berliner Aufklärung*, Bd. III, Hrsg. im Antrag der Kant-Gesellschaft, e. V. von V. Gerhardt, R.-P. Horstmann und R. Schumacher, Walter de Gruyter, 2001, S. 141-151.
- (18) 『基礎づけ』によれば、実践的法則は「意欲の客観的原理」であり、格律は「意欲の主観的原理」である(vgl. IV, 401)。また、『実践理性批判』においても、実践的法則は「客観的」な実践的原則であるが、格律は

「主観的」な実践の原則である (vgl. V, 19)。なお、格律は、Maxime の訳語であり、「格率」と訳される場合が多いが、ここでは行為にかかわる実践の原則を意味しているので、「きまり、法則」という意味を持つ「格律」を訳語とした。『新字源』改訂版、角川書店、小川環樹・西田太郎・赤塚忠・編、1994 年、502 頁を参照。

- (19) S. Sedgwick, On Lying and the Role of Content in Kant's Ethics, in: *Kant-Studien* Würzburg 1988, S. 293-316. シジウィックは「法の形而上学」と「応用法」とを区別し、カントの厳格な虚言禁止が前者の立場からのものであるとする。また、『虚言権』論文は完全義務と不完全義務との義務の衝突が主題であるという「標準的読み方」に対して反論するなど示唆に富んでいる。ただし、人間性の権利と人間の権利（自他の諸々の権利）との区別に着目しない点は本稿と異なる。
- (20) 例えば、近年のグリュネヴァルトの次の論稿がある。これは『人倫の形而上学』の「法論への序論」の中の従来注意されてこなかったカントの論述に着目しつつ、カントが具体的には「侵害を犯さないような不真実性」ということを視野に入れていると論じている。テキスト内在的な分析によって、このようなカントの立場を是としつつ、『虚言権』論文でのカントの議論には疑問を呈している点で教えられる論文である。Bernward Grünwald, Wahrhaftigkeit, Recht und Lüge, in: *Recht und Frieden in der Philosophie Kants*, Bd. 3, Hrsg. im Auftrag der Kant-Gesellschaft e. V. von V. Rohden, R. R. Terra, G. A. Almeida und Margit Ruffing, Walter de Gruyter, 2008, S. 149-160.

\* 本論稿は 2009 年 6 月 28 日のカント研究会第 233 回例会での発表原稿に手を加えたものである。例会では貴重なご意見を伺えたことに、この場を借りて深く感謝申し上げます。

## 《Summary》

Probleme der Abhandlung Kants:  
*Über ein vermeintes Recht aus Menschenliebe zu lügen:*  
Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten

SUGASAWA Tatsubumi

## Zusammenfassung

Erstens werden wir den Charakter des kategorischen Imperativs, dass er ein Gesetz von „dem, was geschehen soll, ob es gleich niemals geschieht“, betrachtet. Zweitens gehen wir in bezug auf Kants Meinung, dass eine Kollision von Pflichten gar nicht denkbar ist, der Bedeutung des „Verpflichtungsgrundes“ nach. Drittens werden wir sehen, dass es in Kants Abhandlung: *Über ein vermeintes Recht aus Menschenliebe zu lügen* die folgende Diskussion gibt, dass die Rechtspflicht des Verbots zu lügen in der Metaphysik der Sitten eine weitere Tragweite hat als die nach positiven Gesetzen betrachtete Pflicht des Verbots zu lügen und ein Grund der Rechtspflicht des Verbots zu lügen darin besteht, ob die Wahrhaftigkeit in Aussagen das Recht der Menschheit überhaupt verletzt, wenn sie auch den anderen nicht schadet. Aus diesen drei Punkten folgt, dass der kategorische Imperativ das Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten verlangt.